

高齢者福祉の現場にいる人たちが医療・介護・福祉の新たな見方を学ぶための研修

福岡県軽費ケアハウス協議会

〒818-0025 福岡県筑紫野市大字筑紫 38 番地

助成事業の概要

実施目的：超高齢社会の到来、認知症高齢者の増加、介護保険の持続可能性の不安、人口減少の問題など、福岡県でも人口構造の変化に関して、先行き不安や悲観の情報があふれている。しかし高齢化や超高齢社会を悲観的に見るだけでは、高齢者福祉や介護などの仕事に入ってくる若い世代は減少していくばかりである。本研修企画は、従来の見方を変えるような発想や価値観を学ぶ機会を作るものである。福岡県の軽費老人ホームやケアハウスの現場で働くひとたちが、従来にない新しい観点や見方を学ぶ機会となることを目的として実施した。

実施時期 (1)：令和 7 年 7 月 10 日 (木) 14：00

内容 (1)：二ノ坂クリニック二ノ坂保喜医師に在宅医療の経験を基に講演して頂き九州大学安立清先生との対談や参加者との意見交換を通して軽費ケア職員に新しい視点を得てもらう。

実施時期 (2)：令和 7 年 12 月 20 日 (土) 14：00

内容 (2)：宅老所よりあい代表の村瀬孝生氏に認知症介護について講演して頂き、九州大学安立清史先生による解説、そして村瀬孝生氏と安立清史先生の対談により理解を深め、軽費ケア職員に新しい視点を得てもらう。

事業の成果

【令和 7 年 7 月 10 日の研修】

原則的に自立型である軽費老人ホーム・ケアハ

ウスでは看取りや在宅医療に接する機会が少なく、今在宅医療でどのような取組が行われているのか知る機会が無かった。また、実際に在宅で看取りを行っている二ノ坂医師の話を聞くことにより各施設でどのような対応を取る事ができるのか考える機会となった。二ノ坂医師が言われた、医療だけでは看取りは出来ない。医師は 1 日 1 時間程度しか関われないので残りの 23 時間をどうやって安心して生活してもらえるように支援するのが大切という言葉に参加者から感銘を受けたという声が多く挙がった。そして、二ノ坂医師と安立先生の対談では、医療と介護それぞれ制度に沿った運営が求められる事業であるが、目の前の人（利用者）に本気で向き合わず、制度ばかりを気にしてケアをすることが正しいのかという普段の研修とは違った視点での問題提起をされて参加者からはこれまでの研修では学べなかった新たな視点だったという感想があった。

【令和 7 年 12 月 20 日の研修】

認知症高齢者はともすれば、何もわからないと思われがちだが短期記憶が出来なくとも目の前の出来事については鮮明に受け取られることも少なくない。村瀬氏がこれまで経験されてこられた認知症高齢者や自身の親の介護の経験を元にこころのあり方や認知症高齢者と接するにあたって大切な事を講演していただいた。日々、思い通りにならない介護の現場において目的を達成する為だけの「ことば」を使う事でお互いの気持ちが辛くなるという実体験を聞くことができてこれまで認知症高齢者の対応に苦慮していた職員から目から鱗が落ちたという感想を聞くことがで

きた。また、人の一生を生まれてから言語概念を獲得するまでの期間、言語概念を獲得し認知症になるまでの期間、認知症になった以降の期間に分けて、言語概念を主に使う世代と言語概念を獲得前、喪失後の世代では見えている世界が異なる。その為、言語概念を持った世代が相手の世界に合わせる事が大切であることを学んだ。

ケアハウス協議会の開催する研修会でもこれまでになかったアイデアを提案してもらい、より先進的な内容の研修会を企画する事もできるように活動していく。

■ 成果の広報・公表

今回の研修成果を安立清史氏のホームページとブログ、会員施設である社会福祉法人和幸福社会のホームページに掲載して公表した。また、1 月 9 日の福岡県軽費ケアハウス協議会の役員会と 2 月 19 日に開催された福岡県軽費ケアハウス協議会施設研究委員会の中でも今回の研修についても結果を報告した。今後は福岡県軽費ケアハウス協議会の総会でも今回の研修成果を改めて会員施設に対して周知していく。

■ 今後の展開

今回の研修会で得られた知識を参加者が各施設へ持ち帰り、各施設の職員へ伝達し、新たな視点での高齢者福祉の実践に活かしていくことで、入居者の生活の質が向上すると考えられる。また、職員が認知症高齢者の BPSD 対応に疲弊している中で「言語概念を主に使っている介護者世代」が「言語概念を失い始めている 1 回性、主観性、事後性、感覚的という世界で生きている認知症高齢者」に対してどう接していけばストレスを感じにくくなるのかを学んだ事で認知症高齢者への処遇レベルが向上した。そしてこれまで知らなかった認知症高齢者の世界を理解した事でストレスによる離職を防止するという視点での取組も展開できると考えられる。今回参加した会員がこれまでになかった新しい視点を得て、今後の福岡県軽費